

方剂名	効能	生薬組成	
		主治および証	病機 方意
書籍			
清熱剤 清気分熱剤 2			
ちくようせつこうとう 竹葉石膏湯	清熱生津・益気和胃	竹葉 9g・石膏 30g・半夏 6g・麦門冬 12g・人参 6g・炙甘草 3g・粳米 9g 水煎し服用する。	
傷寒論	<p><主治> 邪熱未清、気津両傷 微熱、胸苦しい、不眠、嘔気、咽の乾燥、乾咳、口渴があり水分を欲しがる、息切れ、疲労感、舌質が紅で乾燥、舌苔が少ない、脈が細数で無力などを呈す。</p> <p><病機> 熱病の後期で、高熱、多汗などにより気津が消耗し余熱が残存している状態である。高熱は消退したが、邪熱が残っていて、微熱、舌質が紅、脈が数を呈し、内熱が上擾するので胸苦しい、不眠がみられる。津液が消耗しているために、口渴があり水分を欲する。舌の乾燥、舌苔が少、脈が細であり、胃津が不足して胃気が上逆するので食欲がなく、嘔気があり、肺津不足で肺気が上逆するので咽の乾燥、乾咳がみられる。発汗などにより津液が外泄し、これに伴って気も損耗するために、息切れ、疲労感、脈が無力などを伴う。</p> <p><方意> 気分邪熱を清泄すると共に、生津益気する。 辛寒の竹葉・石膏が主薬で、気分邪熱を宣透清泄すると共に、胸中の熱を除いて除煩する。人参・炙甘草は益気生津に、麦門冬は養陰生津に働き、気津を回復する。炙甘草・粳米は和中養胃に働く。大量の清熱生津薬に辛温の半夏を少量加えると、半夏の温燥の性質が消失して降逆止嘔、止咳の効能が残り、同時に生津薬の滋膩の性質を軽減させることができる。全体で清熱、生津益気、和胃降逆、止咳の効能が得られる。</p> <p><参考> 本方（竹葉石膏湯）は、白虎湯の知母を除き、益気の人参・滋陰の麦門冬・清熱除煩の竹葉・降逆和胃の半夏を加えたものである。 本方（竹葉石膏湯）は、一般に、熱病の経過にみられる気津両傷に用いてよい。雑病（糖尿病など）や中暑（熱射病など）で、気津両虚を呈するときにも応用してよい。 本方（竹葉石膏湯）は清熱降逆、生津益胃の効能ももつので、胃陰虚の胃火上炎で口内や舌のびらん、歯齦の腫脹と疼痛、口臭、乾嘔、口渴、舌質が紅絳で乾燥、舌苔が少、脈が細数などを呈するときにも用いることができる。</p>		